西多賀小児科乳児教室（平成７年５月）資料

ことばへの支援と育児

阿部　幸泰（指導室長）

はじめに

私達が「ことば」という時、それは「話ことば（口でものをいうこと）」を往々にイメージします。こうしたことから、乳児期（～１歳）は、「ことば」だけを抜き出してお話することはたいへん難しいことです、特に「話ことば」については。

そこで今日は、乳児期に「ことば」の発達の背景とも、前提ともいえる育児の大切な点についてお話します。

本来、子どもは一人としてまったく同じ子どもはいません。

「障害児とは」

ところが子どもの中には、体や心の働きに何等かのさしさわりがあって、他の子と同じような育て方だけでは、発達が遅れ、発達がゆがんだり、かたよったりする子どもがいます。

このような、特に心をくばり、手をかけることが必要な子を、障害児と呼びます。つまり、障害児とは、どこにでもいる、ありふれた存在です。

「障害児は何よりも子どもである」

「ダウン症の○○ちゃん」とかいうレッテルが消えて、じかに「○○ちゃん」が、目の中に飛び込んでくるとき、効果的なふれ合いが生まれます。障害児への係わりは、全体としての子どもであることに視点をすえ、受け入れていただきたい。

愛されたい、認められたい、色々なことをしたい、遊びたい、外へ出たい、友達が欲しいなど､子どもならどの子も持っている様々な願いを満たして上げることが基本です。

その願いを遂げるために必要な子ども自身の力を、引出して上げ、励まして上げ、育て、補って上げるのが、特別な配慮と援助です。

障害だけをみて、何よりも子どもであることを見失わないように（ダウン症の子と共に生きる根本)。

「養育の原則といわれること」

１）家族全体で迎えいれる。

この子と共に家族全員が生きていくという心構えに早くなること。お父さんや家

族の支援は絶対に必要です（お母さんが一人で悩まないで済むように、また「私一人だけ…」と思い込まないで居られるように）。

悩まないで済むように、子どもを外に多いに連れだして上げて下さい（最初は人目に触れることに戸惑いを持つことと思いますが、これから長い子育てが始まります。社会の中で、また色々の支援をしてもらうためにも、いずれは人目に触れるのであれば、早くから。一種の慣れも必要ですし、他人の拒否的な反応にであったら、無視して切り抜けるように）。

時に親戚や友人、ホームヘルパー制度を利用するなどし、一人で、時には夫婦でリフレッシュして下さい。

2）個性としてとらえる。

他の子と比べるのをやめ、違いがどのように伸びていくか、育っていくかを見守りましょう。

3）子どもをよく観察する。

ダウン症に拘っていると、全体としての子どもの姿が見えなくなり、出来ないところ、変わったところだけが目につくことになりがちです。特に、発達表の月齢や年齢などに拘らないように。発達表の利用は、一般の発達の道筋と照らし合わせて、発達のどの時点から落込みが始まったのかを確かめる程度に。

発達を部分的に見ないで、様々な領域の発達と関連づけて総合的にみるように。

4）医師その他との連携

・医師その他の外部の人々との協力が絶対に必要です。必要に応じて他の専門家を紹介していただけます（中耳炎の繰り返しに注意し、難聴の予防に心構がける）。
・親と親の結び付きも大切です。
親達の生活の知恵は、時に専門家の助言に優るものがあります。
親の会や、地域で企画される障害児と両親の参加できる行事等には積極的に参加し、リラックスすると共に新たな自己を発見して下さい。
・遠い親戚より近くの他人といいます。近隣とのつきあいも大事です。

5）いとしさを越えて

かわいそうな子だと思わないこと、かわいがり過ぎないこと。
良いことをした時はほめ、悪いことをした時は、「ダメ」と言いましょう。

6）子どもにあった環境

子どもにあった環境とは、現状維持を意味するのではなく、子どもを一歩前進させる力をもったものが子どもにあった環境です（集団保育や統合保育の機会の利用など）。

7）遊びを豊かに

遊びは子どもの特性です。遊びから色々なことを学んでいきます。
ことばへの対応も、遊びから始まります。

赤ちゃんに授乳する時、母親に抱かれた赤ちゃんは、母親の暖かさや肌触りや居心地のよさに満足を感じ、その時、母親がほほをつついたり、微笑みかけたり、話かけたり、歌いかけたりすれば、喜びはもっと広がっていきます。そうような経験を経て、赤ちゃんが他人に微笑み返すようになります。

この微笑みの応答（おはしゃぎ反応）こそ、子どもの伝え合いの最初の表現行為であり、ことばのそもそもの始まりです。

子どもの聞き取りづらいことばを親身になって聞いて上げること、身振りによる伝えを受け入れて上げることです。

８）友達をつくる

相手を求める欲求、共にいる喜びは、人間が生まれながら持っているものです（「集団所属の欲求」といわれ、人間の本能の一つといわれています）。

子どもと子どもの係わりは、大人との係わりより遅れて発達します。

まず、母親、父親、そして兄弟など家族、さらに１歳頃から周りの子どもに気づき、２歳頃周りの子どもへ熱い眼を向け、３歳頃から親の手を振り切っても友達を求めていきます。

友だちと泣かしたり泣かされたりしながら育っていく中で、遊びは益々豊かに複雑になり、自分の立場を主張することと相手の立場に寛容にになることを学び、社会の一員としての素地が育っていきます。

子どもには、大人のような手加減というものがありません。友だちの中にはお子さんにいじわるをしたり、あざけったり、いじめたり、仲間はずれにする子もいるでしょう。そのことでいちいち悩むよりは、子どもはこうやって強くなっていくのだという確信を持つことです（かわいい子だから旅をさせる心構えで）。

「話ことばへの援助」

・話ことば（表出言語）の発達のためには、まず大人のいうことを理解し、それに伴うしぐさ（理解言語）が豊かになることが条件と言われています（氷山の水面上の氷より、水面下の氷の方が何倍も大きいです。水面上が表出言語で、水面下が理解言語と考えて下さい）。
それにはまず、大人が、何かを伝えたくなる相手としてふさわしい存在になる努力も必要です。そのためにも、お子さんのそうした気持ちが、微笑みであれ、目の動き、体の動きであれ、「あ～」という発声であれ、身振りであれ、指さしであれ、気持ちの何かを表現してきた時は、しっかりと受け止めて応じて上げて下さい。
「話ことば」がでるようになるためにも、乳児期ではまず母親や家族との係わりが何よりも大切で、理解言語が豊かになるよう心構けて下さい。

・話ことばが言えるようになっても、語尾を言わなかったり、語尾だけしか言わないことが珍しくないので、ゆっくり一音一音、はっきり話かけるよう心構けて下さい。

おわりに

参考までに、ダウン症児の「言語発達」の資料を添えておきますが、一人一人、子どもによって異なりがあることを、くれぐれも念頭において目を通して下さい。

何よりも大切なことは、お子さんが何かを大人（母親や家族）に伝えたくなる気持ち、伝えたくなる大人との関係をまず育てることです。

気になることがありましたら、いつでも当教室のスタッフにご相談下さい。

参考文献

Ｒ・ブリンクワース：「ー育児相談ー　ダウン症児のために」、日本放送出版協会。

中島誠他：「ーからだ、ことば、知能を育てるー　ママママとままま」、アカデミア出版会。

池田由紀次：「ダウン症児の早期教育プログラム」、ぶどう社。

ユニス・マックルーグ：「自立するダウン症児たち」、メディカル出版。